

Cutting-Edge

[カティング・エッジ]

Move この人にきく

さらなる改正に向う DV防止法とDV対策

2001年に制定され、2004年に改正されたDV防止法(改正点については「ムービング」39号[2005年]で簡単な紹介をさせていただいたことがある)が、さらにバージョンアップに向けて動き始めている。この3月には、ぼくもメンバーである内閣府男女共同参画会議「女性に対する暴力に関する専門調査会」がまとめた「配偶者暴力防止法の施行状況等について」が出され、与党の委員会でも新たな改正にむけて議論が進みつつある。

今回の改正の方向性の主要なポイントに、保護命令対象範囲や接近禁止命令の対象の拡大がある。つまり、保護命令の対象となる暴力に脅迫行為が加えられる可能性が出て来たのである(これまで精神的な暴力だけでは保護命令の対象にはならなかったが、脅迫が加えられることで、被害者の安全はより確保されやすくなるだろう)。また、保護命令の対象を被害者の親族や支援者にも広げることも考えられている。さらに、接近禁止命令についても、電話、ファックス、手紙、メール等の間接的な接触の禁止も視野に入れられている。保護命令の迅速な発令や、裁判所と配偶者暴力相談支援センターとの連携(特に保護命令が出されたことの通知)も考慮されることになるだろう。

被害者の自立支援、特に生活費・住宅の確保や就業促進についてもより強化される方向だ。外国人被害者や障がい者(特に障がいがある被害者のなかで大きな割合を占める精神障がい者)、さらに高齢者への対応も充実させる必要がある。なかでも、被害者が同伴する子どもへの包括的な支援体制(これまで不十分だった教育関係者への研修なども強化されるべきだろう)の充実は不可欠だろう。

先頃、徳島県で発生した、加害男性による被害女性の殺害事件(子どもたちの目前で殺害されるというきわめて痛ましい事件だった)でも見られたように、加害者による被害者の居場所の調査や追跡という問題も考えなければならない。被害者の安全確保(内閣府の被害者への調査によれば、回答した被害者の55%が、配偶者と離れた後、追跡された経験があるという)も重要な課題だ。

さらに、民間シェルターなどの諸団体への援助(なかでも経済的支援はより強化されるべきだろう)と(広域の連携も視野に入れた)関連諸機関のネットワーク化は、一層推進されるべきことだろう。

データDVや加害者更正については、今回は法律という形では書き込まれないようだ。ただし、両者とも、これまでの経過をふまえ、調査研究や教育・啓発が進められていく予定だ。

あらゆる領域での研修や広報活動の充実、さらには学校教育・社会教育の場での予防啓発など、DV防止にむけてやるべきことは山積みである。



CONTENTS

Move この人にきく	1P
Books ジェンダー最・前・線	2, 3P
Information	4P



京都大学大学院文学研究科教授

伊藤 公雄
(いとう きみお)

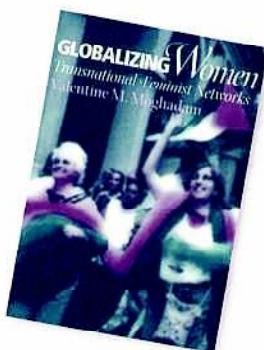
未来・ことば

境界とは何かがそこで止まる地点ではない。あらゆる境界とは、ギリシャ人たちも認識していたように、何かがそこから存在し始める地点の謂である。

マルティン・ハイデガー

20世紀のドイツ哲学者

M. Heidegger, 'Building, dwelling, thinking,' in Poetry, Language, Thought (New York: Harper & Row, 1971)



■ Valentine M. Moghadam 著
■ The Johns Hopkins University Press
■ 2005年初版



Globalizing Women: Transnational Feminist Networks

(仮邦題『グローバルな課題に取り組む女性たち——国境を超えたフェミニスト・ネットワーク』)

グローバルな女性運動は1980年代後半から形成されてきた。国連女性の10年やナイロビ世界女性会議を経て、リプロダクティブ・ヘルス／ライツや女性に対する暴力など、東西や南北の違いを超えた女性に共通する課題が共有されたことによる。IT技術の進展も女性運動のグローバル化の追い風になってきた。本書の著者もまたこれらの影響を肯定するが、同時に、新自由主義経済政策による世界市場の形成を重視する。この経済のグローバル化により女性は労働市場に駆り出される一方、グローバル化への対抗として宗教原理主義が台頭してきたからである。著者は女性運動のグローバルな連携を、社会的、経済的、政治的、文化的变化の産物と見るという点で、社会運動を進める主体を強調する見方とは立場を異にする。

本書でいうグローバルな女性運動は、単に各国の女性運動や女性NGOが組織化してきたものではない。設立当初よりグローバルな課題に取り組むために形成された複数の国にまたがるプラットな組織である。著者はこれらを国境を超えたフェミ

ニストネットワーク(TFNs)と命名し、今日世界で活動しているTFNについて幅広く言及しているだけでなく、6つのネットワークを事例としてより詳しく取り上げている。そのうちの半分、3つは「イスラム法の下で生きる女性たち(WLUMIL)」などイスラム世界の女性ネットワークが取り上げられていることは本書を特徴づけるものであり、イスラム世界の女性運動を知ることができるものである。

国境を超えたフェミニスト・ネットワーク

(Transnational Feminist Networks)

人権、リプロダクティブ・ヘルス／ライツ、女性に対する暴力、平和と反軍事主義、フェミニスト経済学などの共通の課題でつながっている女性のネットワーク。国境を越えた社会運動の一環であるが、単に男性支配に対抗する女性の運動ではなく、グローバルな公共政策のあり方にフェミニストとしての独自の視点を掲げて取り組むもの。

おだゆきこ 織田由紀子（日本赤十字九州国際看護大学教授）

Are Women Human? : and Other International Dialogues

(仮邦題『女性は人間か？——国際的な対話』)

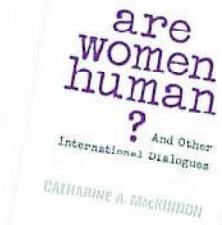
本書は、フェミニズムの論客として名を馳せてきたマッキノンによる、ボスニア紛争など、主に国際的なテーマを扱った論文集である。

マッキノンは、日常生活と国際的な人権侵害についてふたつの連続性を提起する。ひとつは、公私への対応を分けるという国家の行動原則について。男性が互いの権力の境界を定めた国境は、その内側で起きることについて他国は干渉しないという国際法システムである。女性差別撤廃条約(子どもの権利条約)に 국가が他の国家による人権侵害を通報するための制度がないことは、家庭内と同様、外からは口をはさまないという扱いの表れであり、「内戦」における女性のレイプや虐殺、文化や宗教の名による女性に対する暴力を見逃す言い訳になってきたと指摘する。もうひとつは、平時における女性への暴力やボルノグラフィーの氾濫が、戦時に女性への暴力を効果的に遂行する土壤を作っているというものだ。これらは、平時に個人的な行為とみなされているために、戦時にも国家の行為として扱われてこなかった。

こうした状況を徐々に変えてきたのは、女性たちの世界的な運動である。女性たちは、「暴力を受けない権利」など、具体的な状況の解決を求めて、平等権を具体化させてきたのである。

同様性(similarity)の原則

マッキノンによれば、平等論が、男性を基準に「同じものは同じように、違うものは違うように扱う」という同様性の原則に基づいている限り、そこで扱われる権利とは、男性が必要とする範囲に限られてしまい、妊娠や性暴力など女性がかかえる問題を正しく扱うことができない。性の平等を実現するためには、性が不平等であるということを考慮し、男性優位を支える制度を終わらせる方法を講じる必要がある。女性に対する暴力は不平等な男女の力関係の表れであり、平等とは「(男性と)同じになること」ではなく、「序列をなくすこと」なのである。



■ Catharine A. MacKinnon 著
■ The Belknap Press of Harvard University Press
■ 2006年初版

おうみみほ
近江美保

(神奈川大学大学院法学研究科博士後期課程・国際女性の地位協会理事)

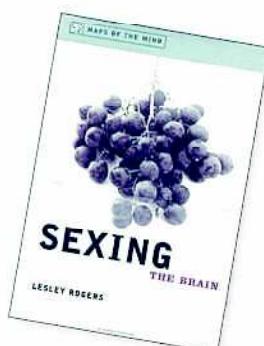


Sexing The Brain (仮邦題『脳を性別化する』)

XXかXYか——この遺伝子の組み合わせの違いにより、社会にはひとを「男性」と「女性」とに二分化する認識の枠組みがある。性染色体を含め男女間では遺伝子が違うから脳のつくりも違う、だから脳が指令する行動も男女で違うのだと社会一般に信じられており、科学者もまた遺伝子を根拠に生得説を主張する。しかし、ジェンダーの生得説を支持する科学者たちの主張は、MRIやPETなど最新の神経画像工学研究のアプローチを用いても、男性は抽象能力が優れているといったジェンダー・ステレオタイプを実証するには至っていない。

本書の著者Rogersはジェンダー生得説に対抗する立場を取り、社会的経済的格差をはじめあらゆるジェンダー格差を踏まながら、生物的要因のみならず社会的要因からもジェンダーを検討すべきだと主張する。人はジェンダー行動パターンを生得的に備えているのではなく、環境もまた人の脳をつくり、行動を促すホルモンに影響を与えていると指摘する。本書は、ジェンダーが自然であるという主張に対し、ジェンダーの多様性をつくり出している社会的文脈に照らしながら、生

物学、社会生物学、神経科学の新しい視点に立ち、オルタナティブな説明を提起している。



■ Lesley J. Rogers
■ Columbia University Press
■ 2001年初版



神経画像工学(Neuroimaging technology)

非侵襲な視覚化技術によって人の体の生理的活動を測定する技術開発研究分野のこと。血液中のヘモグロビンが酸素との結合度によって磁気特性が変化することに着目し、生体の活動領域で血流が増加する際のデオキシヘモグロビンの相対的濃度低下をMR画像コントラストとしてとらえるBOLD(Blood Oxygenation Level Dependent)法や磁気共鳴機能画像法(Functional Magnetic Resonance Imaging, fMRI)は、人の高次認知機能解明をめざす脳科学や心理学において正常被験者の脳活動計測の主要技術となっている。

Ge Jianqiao (北京大学大学院心理学研究科博士後期課程)
力武由美 訳



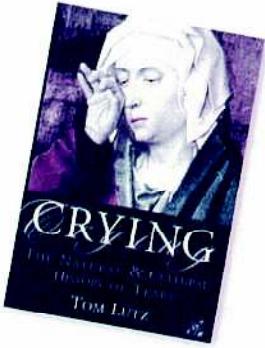
Crying: The Natural and Cultural History of Tears

(仮邦題『泣く——涙の自然史と文化史』)

有名な実験のエピソードがある。男女同数から成る二つのグループに、びっくり箱が飛び出して泣き出す赤ん坊の映像を見せる。一方のグループには、赤ん坊が男の子だと伝え、他方のグループには、それが女の子だと伝え、泣き出した理由は何だと思うかアンケートを取る。すると、男女とも大多数の回答者が、「男の子」は怒って、「女の子」は怖がって、それぞれ泣き出したのであろうと解釈するという。

本書は、そうした社会心理学的実験や、世界各地の民族に関する人類学的知見の整理は言うに及ばず、生理学的な涙腺のメカニズムから、ヨーロッパの絵画や文学、アメリカの映画やスポーツ文化までを議論の射程に収めた涙の総合研究である。とりわけ、泣くという行為が、いつもすでに男女で非対称な意味をもって期待されること、そして、その期待が、時代や文化によってさまざまに構築されることを本書は掘り下げる。涙とは、悲しみや喜びや、あらゆる矛盾した情緒を同

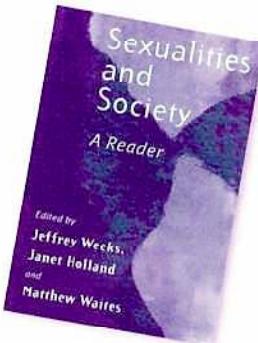
時に指し示す逆説の泉だが、その豊饒(と欺瞞)とは、ジェンダー研究が見据える世界のありようと不可分に連動し、芸術作品の価値から資本主義の力学までを規定する、このうえなく力強い政治性を秘めているのだ。



涙 (tears)

ジェンダー研究の普及した1980年代以降、それまでは個人的・主観的なものと思われがちであった人間の情緒を歴史化する試みが盛んになった。なかでも、きわめて普遍的かつ人間的な感情の表れであると考えられてきた涙について、その文化的な差異や構築性を指摘する研究が目立つようになった。アメリカの感傷小説における涙の時代性を論じたジェイン・トムキンズの『扇情的な構図』や、革命をはさんで変容したフランスの風俗史を読み解くA・V・ビュフォーの『涙の歴史』などが、その先駆的な成果として記憶されよう。

吉津 智之 (立教大学文学部教授)



Sexualities and Society: A Reader

(仮邦題『選集 セクシュアリティと社会』)

本書は「セクシュアリティへの社会的歴史的アプローチ」「セクシュアル・アイデンティティとジェンダー」「グローバリゼーション・権力と抵抗」「性の価値と生の実験」の5部構成で、セクシュアル・ナラティブ研究で名高いKen Plummer、若者のセクシュアリティ研究に造詣が深いSue Sharpe、健康を人権・ジェンダー視点から研究しているRosalind Petcheskyなど、いずれもセクシュアリティ研究の精鋭による研究成果の最前線がこの一冊に収められている。

本書に抜粋された28本の論文はそれぞれ異なるアプローチを取るが、いずれもセクシュアリティを社会的文脈の中に位置づけ、両者が複雑な力関係にあることをあぶり出している点で共通している。また、本書で言う「社会」とは広義の「グローバルな社会」をさすと同時に、国家や地域、アイデンティティに根ざした「特定の社会」をも意味する。これらの研究が、フェミニズムやレズビアン・ゲイ研究など20世紀後半の社会学研究の新しい動向に影響を受けていることは明らかである。

本書が取り扱う領域は社会学、文化人類学、カルチュラル・スタディーズ、歴史学、社会政策研究からジェンダー論、フェミニズム

ニスト研究、レズビアン・ゲイ研究まで幅広く、グローバルな視点と学際的な手法を用いた新しい研究領域を提示している。研究者や学生のみならずセクシュアリティとジェンダーに関心のあるひとには貴重で刺激的な知見を提供している。

クィア (queer)

クィアとは、脱構築、ポスト構造主義、ポストモダンの枠組みを用いてながら異性愛主義を問題とし、社会が逸脱とみなすあらゆるセクシュアリティの再検討を促す、きわめて流動的な研究群を包括する用語である。フェミニズム理論が異性愛、すなわちジェンダー・ポリティクスを問題とするのに対し、クィア理論は「ゲイのポリティクス」すなわち「ゲイ／ストレート」「男性／女性」などセクシュアリティを二分化する境界を問題とする。クィア理論を他の諸理論から独立させることには未だ疑問の余地があるため、本書の表題では「クィア」「クィア理論」「クィア・ポリティクス」という用語は用いられてはいないが、本書を貫徹する重要なテーマとなっている。

Beverley Anne Yamamoto
(大阪大学大学院人間科学研究科講師)

- Jeffrey Weeks
Janet Holland
Matthew Waites 編
- Polity Press
- 2003初版



Why So Slow?: The Advancement of Women

(仮邦題『なぜこんなに遅いのか——女性の地位向上』)

本書は、認知社会学の立場から、あらゆる領域における女性の地位向上はなぜかくも遅々としているのかという課題に迫る。男女の特性を、著書のValianは“gender schemas”と呼ぶ。男女の差異は家庭で再生産され、文化の中で強化・増幅され、その結果、社会は男性を高く評価し、女性を低く評価するようになる。また男女が本質的に違うという前提は、職場においても機能し、男女のキャリア形成に大きく影響している。Valianは専門的心理学をはじめ、社会学、経済学、生物学の枠組みを用い、統計学と実験科学のデータや事例を駆使し、ジェンダー間の不均衡が生じる要因を学際的に分析している。

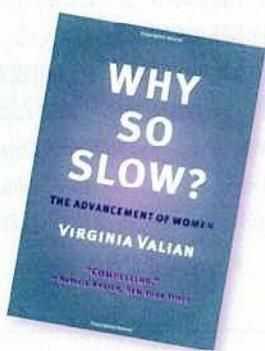
本書のタイトル *Why So Slow?* は、女性が組織の幹部職に就くことから排除されていることを不可視化している構造「グラス・シーリング」を意味している。Valianは不可視な状況を可視化していくことが重要であり、女性に公正な社会へと変革していくためには、法制度の整備とアファーマティブ・アクションの採用が重要な方策であると指摘している。

ジェンダー・スキーマ (gender schema)

スキーマとは、ひとの知覚を組織する認知体系で、社会化の過程で形成される。ジェンダー・スキーマとは、「男性らしさ・女性らしさ」という概念をむすびつけて男女の差異を認知する体系である。したがって人は、男性であれ女性であれ、男女は本質的に違うという認知体系を脳内に形成していくため、男女の性格や行動、知覚を認知する際に、男性優位に認識しがちである。このことが職場における男女の評価にもあらわれ、職場のジェンダー構造が変わらない要因となっている。ジェンダー・スキーマが特に職場において問題なのは、男性は本質的に優れた性で、女性は本質的に劣った性であると認知することであり、女性の職場における地位向上がなかなか進まない要因となっている。

Neelam Kumar (インド国立科学技術開発研究所研究員)

力武由美 訳



- Virginia Valian
- The MIT Press
- 1998初版





ジェンダー・エッセー

科学論とジェンダーの研究動向

神戸大学国際文化学部助教授 塚原 東吾 (つかはら とうご)

日本では科学論におけるジェンダー研究は、残念ながら、それほど広く受け入れられている分野ではない。しかし、欧米の研究傾向をみると、ジェンダーの観点から科学史・科学論を検討する研究潮流が、90年代になってから太くそして強くなってきているのを感じる。もちろん科学史・科学論といっても、さまざまな背景からのアプローチがあり一概には言えるものではないが、科学・技術(医療も含む)と社会の関係についてのさまざまな学問体系のなかでは、ジェンダーの観点を置き去りにできるはずではなく、またジェンダーの観点なしに科学・技術・医療の社会的な問題や歴史を検討したとするなら、いまやその欠落自体が問題であるとして検証の対象である。またこれを逆にみるなら、ジェンダー研究の分野からの科学・技術へのアプローチが大きな社会的インパクトを上げるのに成功して、さまざまな領域を刺激しているということでもある。それはちなみに、90年代初めに編集されたイギリスのオープン・ユニバーシティでのジェンダー研究のリーダー(テーマとなる分野でスタンダードとなる主要な論文を集めて一冊にまとめて、その分野の見取り図を示す本。大学など、関連のコースなどでは教科書的に使われるもの)では、*Knowing Women: Feminism and Knowledge*(哲学・思想分野)、*Defining Women: Social Institutions and Gender Divisions*(法制度・社会学分野)、*Imagining Women: Cultural Representations and Gender*(文化表象論的分野)の3冊にまじて*Inventing Women: Science, Technology and Gender*(科学技術とジェンダー)が堂々一冊含まれている。ジェンダー研究の4分の1が、科学技術とジェンダー研究なのである、としたら、それはかなり大きなプレゼンスである。2000年代に入ても、*The Gender and Science Reader* (eds. By Muriel Lederman and Ingrid Bartsch, Routledge, 2001)、*The Feminist Science Studies* (eds. By M. Mayberry, B. Subramaniam, L. H. Weasel, Routledge, 2001)など優れたリーダーが出版されており、この分野の概観に必携である。

科学技術分野におけるジェンダー問題へのアプローチにはさまざまな切り口があるが、非常にスタンダードに科学技術における女性科学者の立場や位置づけを扱った歴史記述が一方にある。多くの優れた、しかし世にはあまり知られることの少なかった、女性科学技術者の生涯と業績について、多くは男性中心の科学技術の世界での葛藤や活躍を描く評伝的研究が、近年、数多く発表されている。また科学が女性をどのように見てきたかについては、ロンド・シーピングによる一連の作品があり、専門家による確実な日本語の翻訳もなされている。さらに科学界が女性科学者をいかに排除してきたかについて、科学研究が西欧キリスト教の修道院の学問スタイルを持ったことに由来するのだという観点からの記述(たとえばMargaret Wertheim, *Pythagoras' Trousers: God, Physics, and the Gender Wars*; David F. Noble, *A World without Women: The Christian Clerical Culture of Western Science*)なども注目されている。

科学哲学・思想方面では、サンドラ・ハーディング、そしてドナ・ハラウェイ

の仕事がスタンダードだろう。彼女たちは現在でも精力的に出版を続けておりSandra Harding, *Is Science Multicultural?: Postcolonialism, Feminism, and Epistemology* (Indiana UP, 1998)は、ポストコロニアリズムと科学とフェミニズムを繋ぐ論考である。ちなみにインディアナ大学出版会は、*Race, Gender and Science* という出版シリーズを持っているらしく、他に意欲的な著作が刊行されているのでその動向を注目したい。ハラウェイにかんしては難解極まりない用語法を駆使したSF系のサイボーグ論が日本でも注目を受けており、最近も対談の翻訳が出されたが、科学論の研究書としては邦訳書の『猿と女とサイボーグ—自然の再発明』(高橋さきの訳)がある。他にも主著といえる靈長類研究の確固とした研究もあり、その日本への紹介と本格的な科学論の立場での検討が俟たれる。

最後になったが、科学論の観点からジェンダーの問題に最も鋭く切り込むスタンスには、いわゆるアーブ・エコロジーとフェミニズムの交差点からのものがある。キャロリン・マーチャントの『地球の死:科学革命と女・エコロジー』はすでに古典の趣を持つが、90年代に入っても*Earthcare: Women and the Environment* (Routledge, 1995)などを公にしている。このラインで最も注目されているのは、インドの環境学者バンダナ・シヴァであろう。緑の革命や、水問題などについて、第三世界の女性の立場から、的確で深い視点からの議論を展開するシヴァにはすでに多くの著書、邦訳書もあるが、最近翻訳が出されたのは『食糧テロリズム—多国籍企業はいかにして第三世界を飢えさせているか』(浦本昌紀 監訳)は、アクチュアルな第三世界の貧困の問題をついている。

以上、シーピング、ハーディング、ハラウェイ、シヴァなどをはじめとする、ジェンダーと科学技術を考える上で最も重要な研究者たちの最近の仕事からはまだまだ目が離せないところだが、他にも生活技術、特に家事や家庭内テクノロジーとジェンダーを扱った研究や、IT技術・ネット空間における女性の表象、人工知能(AI)における男女差の扱いなど、科学技術とジェンダー問題の最新の研究動向については、さまざまな観点から、枚挙に暇がない。日本国内ではこの分野にかんしては小川眞里子による『フェミニズムと科学/技術』があり、コンパクトながら濃い内容を含んでいる。今回は女性の科学技術教育や、医学と女性という面についてはあまり論じられなかったが、特に後者に関して、柘植あづみ、荻野美穂らによる研究は、近年の動向として特に注意が必要な仕事であろう。

バンダナ・シヴァ——

浦本昌紀 監訳

多国籍企業はいかにして

第三世界を飢えさせているか

食糧テロリズム

ヴァンダナ・シヴァ著

浦本昌紀 監訳

(株)明石書店

2006年初版、2007年初版第2刷

北九州市立
男女共同参画センター

ムーブ

〒803-0814 北九州市小倉北区大手町11-4
Tel: 093-583-3939 Fax: 093-583-5107
ホームページ http://www.kix.or.jp/move_we
E-Mail move@move-kitakyu.jp

Cutting-Edge 第26号

【編集・発行】	発 行 日	2007年4月20日
発 行 者	吉崎邦子	
編集協力	女性学・ジェンダー研究ネットワーク	
編 集	力武由美	
発 行	北九州市立男女共同参画センター “ムーブ”	
印 刷	(株)エディックス	

※本誌は再生紙を利用しています。